

E. M. Forster における eternal moment について

村 松 一 男

この小論は Forster の作品を, 'eternal moment' という point of view から眺めたものである。

Collected Short Stories of E. M. Forster (1945) には12篇の短篇が載っているが, その中でここで取扱う2篇と, 全小説5篇の発行年次は次のようである。'eternal moment' はこの年代順に発展し, 漸次消えて行ったものだという見方に立つのである。

Short Stories

Road from Colonus June 1904 (*Independent Review*)

The Eternal Moment June, July, August 1905 (*Independent Review*)

Novels

1. *Where Angels Fear to Tread* October 1905
2. *The Longest Journey* April 1907
3. *A Room with a View* October 1908 (planned 1903)
4. *Howards End* October 1910
5. *A Passage to India* June 1924

I. Forster の Romanticism と 'eternal moment'

現代のイギリス人は大なり小なり Bentham の徒か Coleridge の徒である。

これは1840年の John Stuart Mill の言葉であるが, *Howards End* のテーマはさしづめベンサム派の Wilcox 家の人々と, コールリッジ派の Schlegel 姉妹との対立である。ベンサムの utilitarianism かコールリッジの romanticism か, 現実か詩か。

E. M. Forster is an implicit Coleridgean.⁽¹⁾

彼にとって大切なものは poetry, religion, passion⁽²⁾ であり, 明らかに anti-Utilitarian である。

Forster is ultimately a romantic writer.⁽³⁾

1) Wilfred Stone: *The Cave and the Mountain*, p. 5

2) Forster: *Aspects of the Novel*, p. 98

3) J. B. Beer: *The Achievement of E. M. Forster*, p. 14

Wilcox 家は終局において Schlegel 姉妹の前に膝まづかねばならない。

Where Angels Fear to Tread もロマンチックな枠の中に物語がはめ込まれている。スイスからイタリアへ抜ける St. Gothard トンネルがプロローグとエピローグの役をつとめている。Philip はイタリアへ出発する Lilia に向って、トンネルを抜けた時、窓にとび込んでくるアイロロの鐘楼を見落すなど言う。

the supreme moments of her coming journey—the Campanile of Airolo, which would burst on her when she emerged from the St. Gothard tunnel, presaging the future. すべてが終ってイタリアを引あげる時、Miss Abbott が Philip に向って言う。

all the wonderful things are over.

汽車はサン・ゴタルド トンネルに向って最後の急坂を登っている。

Philip's eyes were fixed on the Campanile of Airolo.

A Room with a View は Forster の小説の中で、Happy Ending に終る唯一の小説であるが、全篇ロマンチックな瞬間の積み重ねで構成されている。

Forster を読んでみると、‘eternal’ という語が一種の雰囲気を作っていることに気付く。

A Room with a View を例にとれば、

the eternal woman, eternal comradeship, eternal dawn, eternal worrying, the eternal smoothness

と言った風に出てくる。

Howards End でも

eternal sunrise, eternal foes, eternal youth, eternal formlessness, eternal verities, eternal future, eternal differences

と ‘eternal’ の語が全篇に鏤められている。Forster の romanticism の基調音かのように。

Forster は1879年の生れで、現在90才の高齢であるが、小説に関しては寡作の人で、その永い生涯に5篇しか書いていない。それが、第5作を除くとすべて26才から31才にかけての青年期の作品である。青春—romanticism—eternal という連想が許されると思うが、14年の間隙をおいて45才の時に書かれた最終作 *A Passage to India* においてさえ、‘eternal’ の響きは消えていない。

the eternal promise, an eternal garden, eternal elephants, that eternal rock, eternal confusion

‘eternal ~’ という組合わせから、‘eternal moment’ が浮び上ってくる。Forster の作品では、‘moment’ そのものが、或は symbolic moment となり、eternal moment となって重要な役割を果しているのであるが、‘eternal moment’ は短篇 *The Eternal Moment* でテーマとして取上げられて以来、もはや群小の ‘eternal ~’ の一つではなく、全小説を貫いて流れる idea となり、plot を決定する重要な契機となるのである。

The Eternal Moment の女主人公 Raby は若き日に或る経験をする。それは彼女の人生の

偉大な瞬間であり、一瞬の中に永遠を抱いた瞬間である。

Miss Raby's first novel 'The Eternal Moment,' was written round the idea that man does not live by time alone, that an evening gone may become like a thousand ages in the courts of heaven.

短篇 *The Road from Colonus* も一老人の永遠の瞬間の物語と見る事が出来る。この二つの短篇で取扱ったテーマを、Forster は小説の plot に使い出す。第1作 *Where Angels Fear to Tread* ではその climax に、第2作 *The Longest journey* ではその発端部に、永遠の瞬間が現われて筋の展開に重要な役割を果たしている。第3作 *A Room with a View* においては、eternal な、symbolic な、幾つかの瞬間が、物語の punctuation をなしながら結末へと導いてゆく。第4作 *Howards End* では eternal moment はもはや重要な契機とはなっていないが、それへの言及がはっきりなされている。14年の空白をおいて現われた *A Passage to India* には eternal moment の影は見られないが、これはもう青年期の作ではない。

人生には偉大な瞬間があり、その瞬間の記憶が我々に生きる力を与える。一瞬が永遠に値する。その一瞬に生きれば人生は豊かに、その一瞬を失えば、人生は徒に死まで時を刻みゆくだけの索漠たる場になってしまう。そう言った idea があたかも Forster の青年期の作品を haunt しているかのようである。

II. The Road from Colonus

これは Lucas 老人の理想郷の発見とその喪失の物語である。老人がその楽園に足を踏み入れた刹那に経験する一種の瞬間、人生と世界を再発見するその瞬間が、このユートピア物語を 'eternal moment' の物語としているのである。

Mr. Lucas は世の中のすべてに興味を失って、ただ年を取ること以外に何も出来なくなった老人である。青年時代にギリシャ熱に取りつかれ、以来40年間、ひたすらギリシャへの旅を生涯の夢として生きてきた。

All his life he had felt that could he but visit that land, he would not have lived in vain.

その念願がかなって、娘 Ethel 達に劳わられながらギリシャへやって来たが、アテネは埃っぽく、デルファイは雨、一向に感激が湧かない。年取れる者には、ギリシャも英国も違いはないのであろうかと落胆しかけた時、昼食の宿に着いて、そこに待望の風物を見出した。すずかけの巨木が緑蔭を作って、樹幹の洞穴から清冽な水が流れ出て驃馬の道に溢れ、牧草地を潤している。この自然の恵みに、村人は洞穴にマリアの像を祀っている。老人はふと、この聖域に入れば最愛のギリシャが我がものになると予感する。見上げると空洞は梢までつづき、裂目から青い空が、緑の葉が鮮かである。老人は溢れる水に足を浸しながら、生涯の目的地に辿り着いたと感じる。

His eyes closed, and he had the strange feeling of one who is moving, yet at peace—the feeling of the swimmer, who, after long struggling with chopping seas, finds that after all the tide will sweep him to his goal.

この陶醉境で、彼は一種の悟りを経験する。今迄かりそめに目にした人が、物が、自然が、すべてが様相を一変して、新しい意味を持って彼を迎えるように思われる。

Mr. Lucas, —in a brief space of time, had discovered not only Greece, but England and the world and life.

このすずかけの木蔭で、泉のせせらぎを耳にしながら泊れたら、

One such night would place him beyond relapse, and confirm him for ever in the kingdom he had regained.

紛れもなくこれは老人の 'eternal moment' である。ここから話はその喪失へと展開してゆき、本気で泊りたいと言い出した老人を無理やりに驟馬に乗せ、引留める宿の人々を振り払って出発してしまう。

旅から帰って数ヶ月後、Ethel はギリシャからの小包を受取る。4月にギリシャの野を色取っていたアスフォルの球根を送って来たのだ。ふと包紙の新聞紙に目をとめた Ethel は、彼女達が訪れた Plataniste で起った惨事の記事を見つけた。すずかけの古木が夜中の嵐に吹き倒され、宿屋はその下につぶれ、五人の住人が惨死した。新聞の日附から彼等が訪れたその夜の出来事と分って Ethel は色を失う。併し九死に一生を得た筈の老人の顔には何の感動も現われない。eternal なものを手にしかけて失ってしまった老人は、不気嫌な扱いにくい老人になってしまって、隣家の子供の騒音に不平を言いつづけるばかりである。

John Beer は、Forster はこの物語で、Lucas 老人はイギリスに帰って、生きるに甲斐なき人生を永らえるより、むしろギリシャに留り、死んでいた方がよかったのだと暗示しているのであり、この暗示が、

This gives the 'moment of vision' a tragic undertone.⁽⁴⁾

と述べているが、まさにその通りで、'eternal moment' には常に悲劇がまつわりつくのである。

Forster は80才の時に、この短篇をレコードに吹込んでいる。

I wrote it half a century ago, after my first visit to Greece.

と語っているが、Lucas 老人を何才と推定するにせよ、半世紀を経過した今では、Lucas と作者といづれがいつれとも分るまい。

Mr. Forster chose to read this story, because he felt he would be in character.

まさに適り役である。併し80才とは思えぬ読みぶりで、Ethel の part など若々しく、解説者は

4) J. B. Beer : *The Achievement of E. M. Forster*, p. 45

to be in the company of this youthful eighty-year-old is indeed a stimulating experience.

とその録音の思出を語っている。

III. The Eternal Moment

“Collected Short Stories of E.M. Forster” (1947) に集められている12の短篇は
These fantasies were written at various dates previous to the first world-war.
(Introduction by Forster)

いずれも4つの小説と同じ年代の作品で、そこには常に Forster が小説で追求したテーマが潜んでおり、時には小説より鮮かに浮彫されているのである。

The Eternal Moment と、問題の瞬間を真向から表題にしたこの短篇は、一人の女流作家の物語であり、若き日の「永遠の瞬間」の後日譚である。南にイタリアの山々を見渡すアルプスの景勝の地 Vorta に、20年ぶりで Miss Raby がやってくる。エスコートしているのは退役の大佐 Colonel Leyland で、旅客の目には似合いの夫婦に映る。

... the time for their activities was passing; he was ceasing to fight, she to write.

They would pleasingly spend together their autumn.

彼女の処女作 “The Eternal Moment” は、20年前に始めて Vorta を訪れた時の作で、それが彼女を有名にすると同時に、Vorta を有名にした。

After the lady's book, foreigners came, hotels are built, we all grow richer.

Vorta は恐れていた以上に俗悪化していた。人情さえ変っていた。嘗ての静かな宿 Biscione は、息子の造った Hôtel des Alpes に客を奪われて、昔ながらの調度やフレスコの中に取残された女主人の口からは愚痴しか聞かれない。自分の書物のなせる業と沈痛な気持の中で、彼女は心の底深く秘めて来た過去の出来事と対決して見ようと決心する。

Do you see that mountain...? A young man fell in love with me there so nicely twenty years ago.

Raby の唐突な叫びで物語は始まっているが、彼女の指差す山は若き日の思出の場所であった。イタリア人の Porter が突然背負っていた荷物を投げ出して彼女の前に膝まづき、花を捧げて求愛したのである。

She must fly with him to Italy, where they would live for ever, always happy, always young.

驚いて咄嗟に逃げ去った彼女の心に、この出来事はいつか焼き付いてしまったのである。

The incident upon the mountain had been one of the great moments of her life — perhaps the greatest, certainly the most enduring.

ロマンスの porter は Hôtel des Alpes の concierge となっていた。嘗てのスポーツマンら

しい、hero のような青年は、今や太った愛想のよい、各国語を自由に操って客を勧誘する働き盛りの四十男となっている。Feo に語る彼女のモノローグのような告白の中に、作者は 'eternal moment' の解説を続けてゆく。20年間彼女はこの男を愛しつづけて来たのだ。

For all her correct behaviour and ladylike display, she had been in love with Feo. この嘗ての自惚の強い少年が、彼女を天国の入口まで連れて行ったのであり、逃げ去ったけれど、eternal remembrance of the vision が彼女の人生を意義あらしめてきたのであり、創作の inspiration となってきたのである。

大佐や、物珍らしく集って来た見物人の只中で、彼女は20年前の真実を引出そうとする。

Answer 'Yes' or 'No'; that day when you said you were in love with me—was it true? 彼女は中産階級の見栄も外聞もかなぐり捨て、自らを笑い物にして省みないのである。

Self-exposure was the only possible basis of true intercourse, the only gate in the spiritual barrier that divided class from class.

心の交流は、そして階級の問題は、Forster の 'eternal theme' である。併し赤裸々な心の交流と言う principle を、人々が好奇の目をみはる中で振りかざして、彼女は一体どのような結果を期待しようと言うのであろうか。

Feo は醜くなった年配の女から、自分の地位と家庭の平和が脅迫されているとしか感じない。尻込みする Feo、嘲笑する見物人、事態を納めて Raby を救い出そうとする大佐の鞭の響きとそっと握らせた金、メロドラマ的雰囲気の中に、Raby は泥にまみれて引揚げねばならない。

She looked at the dishevelled Feo, fat, perspiring, and unattractive, and smiled sadly at her own stupidity, not at his.

すべては徒労であった。彼女は大佐の顔色にも気付いた。

'I have been vexing you as well: I am very silly.'

大佐の返事は二人のロマンス行の結末を告げる。

'It is a little late to think about me.'

The Road from Colonus が Lucas 老人の eternal moment とその喪失を描いたように、これは Miss Raby の eternal moment とその幻滅を描いているのである。

以上二つの短篇で設定された 'eternal moment' の idea を、Forster は以後の小説で plot の一環として使用し出すのである。

IV. Where Angels Fear to Tread

Forster の小説が大部分第一次大戦前の作品でありながら、同時代の作家が殆んど過去の作家となっている中で、今なお高く評価されているのは何故であろうか。一つの証言は、

In Forster's novels, we feel as we do not feel in Galsworthy's or Bennett's or in Kipling's

and Conrad's either, that a philosophical mind is at work.⁽⁵⁾

と言う Fraser の言葉に見出す事が出来、第2の証言は Westland の言葉に見出す事が出来る。

because he solved the greater part of his problem and expressed it, chiefly in carefully handled themes, in novels of excellent construction.⁽⁶⁾

要約すればモラリストで巧みな plot. そう言った作風をこの第1作ははっきり打出している。それはすべてを理解しながら、一向に行動しない知性の人 Philip の悲劇である。彼が始めて行動に踏切った時、'eternal moment' が現出して、人間性を体得したとを感じるが、その瞬間は蜃気楼のように消え去ってしまう。

ロンドンの南東30哩にある町 Tonbridge で Forster は public school 時代を過したが、それがこの小説の Sawston である。第2作でも再び Cambridge, Sawston, Wiltshire として登場するが、それは Forster が攻撃してやまない hypocrisy と snobbism と respectability の町である。Sawston の Herriton 家の人々と、貧しいが人間性豊かなイタリア人 Gino との対立を中心に、喜劇風なタッチでインテリ Philip の限界が追求されてゆく。

Lilia は Mrs. Herriton の亡くなった息子 Charles の妻であるが、家風に合わない嫁として追われるようにイタリア旅行に出かける。Charles の弟 Philip は Sawston に育ちながらその知性の故に俗物根性に反撥し、自由と人間性の国イタリアに心酔している。出発する Lilia に向って、イタリアを古代文化の博物館視せず、

Love and understand the Italians, for the people are more marvellous than the land. と説く。Lilia はその言葉通りに、イタリアの小村で名もない男 Gino に会い、彼を愛して、結婚の通知を送ってくる。Philip は母の命令で結婚を阻止すべくイタリアへ走るが、Lilia に

I've found Gino, and this time I marry for love!

と宣言されて、すごすごと引返さざるを得ない。彼のイタリア心酔は審美的なもの、口先だけのものであった。Lilia は子供を産んで、自らは出産で死んでしまう。Sawston の人々はこの赤子をイギリスに連れて来て、respectable な教育を施し、スキャンダルを未然に防ごうと考え、Philip と妹の Harriet が、赤子の 'Rescue Party' として再びイタリアへ出発する。Lilia のイタリア旅行に chaperon として附添った Miss Abbott も、Herriton 家のやり口に信頼出来ず彼等の後を追う。

Gino は赤子を熱愛している。Abbott が一行の先廻りをして彼の家を訪れた時、彼は生命の連鎖と言った感慨に夢中になっていた。

He stood with one foot resting on the little body, suddenly musing, filled with the desire that his son should be like him, and should have sons like him, to people the

5) George Fraser : *The Modern Writer and His World*, p. 97

6) Peter Westland : *Contemporary Literature*, Vol. 6, *Contemporary Novels*, p. 58

earth.

やがて子供を抱き上げて、

He is made out of me; I am his father.

と叫ぶのを聞いて、Abbott は救出などと言う小賢しい考えに止めを刺される。赤子の入浴を手伝っている Abbott の姿を見て、一足おくれて入って来た Philip は、もはや交渉の望みのない事を哲る。彼女は出しゃばって計画を挫折させた自分に一向腹を立てない彼の態度をいぶかる。

“Because I understand you — all sides, I think — Harriet, Gino, even my mother.”

“You understand wonderfully.”

敵をも味方をも正しく判断しながら、正しい事を遂行する勇気を持たないインテリの正体を、彼女は一度一度剥いで癸いてゆく。

And you — your brain and your insight are splendid. But when you see what's right you're too idle to do it.

Philip の返事は、インテリの悲劇的な告白である。

Some people are born not to do things. I'm one of them.

Rescue Party は失敗して空しく引揚げるかに見えたが、他人の気持など顧慮しない Harriet が、ひそかに赤子を盗み出してきて一転する。それも束の間で、暗闇に馬車が転覆し、投げ出された赤子は死んでしまう。この思いがけない事件で Philip は始めて行動の人となるのである。彼は Gino の家に引返し、赤子を盗んだこと、事故で殺してしまったことを告げる。逆上した Gino の獣のような復讐の手に、拷問され、締め殺されかけ、駆けつけた Abbott に救われる。‘eternal moment’ の場面がこの climax に現出する。

Abbott に制止されて我に返った Gino は、茫然として咽び泣きながら、子供のように彼女に縋りつく。Gino を抱きとめて立つ Abbott の姿が、Philip には女神のように見える。

Her eyes were open, full of infinite pity and full of majesty, as if they discerned the boundaries of sorrow, and saw unimaginable tracts beyond... Her hands were folded round the sufferer, stroking him lightly, for even a goddess can do no more than that.

その目の中に無限の慈悲の光を認めて、彼は刹那に人生に偉大なものがあることを悟る。先には Lucas 老人の悟り、ここでは Philip の悟り、彼等の永遠の瞬間はまた悟りの瞬間である。

He was happy: he was assured that there was greatness in the world. There came to him an earnest desire to be good through the example of this good woman...

Quietly, without hysterical prayers or banging of drums, he underwent conversion.

He was saved.

これは確かに、真摯な行動の人となった Philip が、死生の境を越えて始めて遭遇し得た‘eternal moment’であった。併し巧妙などんでん返しが予定されているのである。

彼は Abbott の心を知らなかったのだ。救出作戦の間にこの娘を愛するようになった彼は、この偉大な瞬間が彼と Abbott の間のものと信じ込んでしまった。赤子の埋葬をすませた一行はイタリアを去る。スイスへの車中で Philip は Abbott に求婚するつもりでいた。彼女の淋しそうな様子を慰め顔に、ひそかに自分に対する愛情の告白を期待していた彼に、彼女の答は意外であった。

She said plainly "That I love him."

Sawston から Lilia を奪った Gino は、Abbott の心をも奪っていたのである。彼女の言葉は Philip に対する最後の判決となる。

I dare tell you this because I like you — and because you're without passion; you look on life as a spectacle; you don't enter it; you only find it funny or beautiful. 永遠の瞬間は彼のものでなく、Gino のものであった。Philip の女神と見えた Abbott は Gino の女神であった。子供を失なって苦しんでいる男に対する女神の憐憫と見たのは、恋人への愛撫であり、女神にふさわしいキスと思ったのは、心の中の恋人への別れのキスであった。

物語はこのように、人間的な Gino に対する、人生の傍観者 Philip の悲劇として幕を閉じる。Gino のような人間性豊かな男と、Abbott のような誠実な女にして始めて 'eternal moment' を持ち得る。しかも Gino にとって Abbott は女神になってしまっていて、彼は平凡なイタリア娘を妻にしなくてはならず、失意の Abbott は Sawston へ帰らねばならない。eternal moment はまたしても悲劇的な色彩に色どられるのである。

V. The Longest Journey

Peter Burra の Forster 論 "The Novels of E. M. Forster" は 1934 年、*The Nineteenth Century and After* に載ったものであるが、Lionel Trilling の名著 Forster 論 (1944) より 10 年早く、Forster 批評の先駆的な役割を果たしている。Great Lives シリーズに Van Gogh 伝を書いたこの 24 才の青年批評家の文章が Forster の目を引いた。

I read it with pleasure and pride, for he saw exactly what I was trying to do; it is a great privilege for an author to be analysed so penetratingly.

Burra はその数年後飛行機事故で夭折する。1942 年に Everyman's Library の一冊として、*A Passage to India* が出た時、Burra の評論がその Introduction として採用され、Forster 自身 Burra 紹介の文を書いている。短い愛情に溢れた文章の中に、本篇に関する言及が見られる。

And I felt particularly gratified that he should emphasize *The Longest Journey*, since it is a novel which most readers have dismissed as a failure.

The Longest Journey は彼の作品中自伝的要素の最も濃い作品だと言われている。1953 年のインタビューの席で

“Do any of your characters represent yourself at all?”

と尋ねられた Forster は、

“Rickie more than any. Also Philip. And Cecil has got something of Philip in him.”⁽⁷⁾

と答えている。

Rickie, 前作の Philip, 次の作の Cecil, 皆 hero とは凡そ縁遠い役柄ばかりである。特に父から Rickie と蔑視された跛の青年に、我々は Forster の分身を見たくないが、それは戯画的な自己描出なのであろう。

Rickie は作家志望で、Forster 式の短篇を書くが、その一つ、Agnes に話して聞かせる Dryad の物語は、2年後(1909)に出る短篇 *Other Kingdom* の原形である。Forster の、そして Rickie の天国であった Cambridge, 地獄であった Public School,

He had crept cold and friendless and ignorant out of a great public school.

それを舞台として繰り広げられる青年達の物語には、随所に作者の思出が鑲められているに違いない。Forster は繰返えし、この作への愛著を語っている。

The Longest Journey is the least popular of my five novels but the one I am most glad to have written.⁽⁸⁾

Burra は Forster の作品には「有り得べからざる事件」が起ると言って、その例に「突然の死」を挙げている。

death in carriage accidents, at level crossing, by drowning, on the football field.

馬車の転覆による赤子の死が *Where Angels Fear to Tread* に出てくる以外、他の三つの死はすべてこの物語に出てくる。Agnes の婚約者 Gerald のフットボール試合での急死。Rickie の母とストックホルムへ駈落した Robert の溺死。そして結末での Rickie 自身の轢死。あたかも Rickie をめぐって、全篇に唐突の死が待ち伏せしているかのようである。

Rickie もまた Forster の弱き Intellectual 群像の一人である。上の Gerald の死が契機となって、彼の生涯が方向づけられ、real と unreal との間を踏み迷って遂に命を落す悲劇となるのであるが、その発端部に、すべての導火線となるかのように、「Wagner の音楽のような」‘eternal moment’ が出現する。Rickie が Philip の系列とすれば、Gerald は Gino の系列に入る、Greek athlete タイプの逞しい男である。恋人達の抱擁のシーンを Rickie が目撃する。

Gerald and Agnes were locked in each other's arms ... Then her lover kissed her face, and immediately it shone with mysterious beauty, like some star.

星のような美しさが永遠を連想させはしても、これだけでは単なる一情景に過ぎない。併しこの光景が目撃者の Rickie に与えた影響は只事でない。

He looked for a moment, but the sight burnt into his brain.

7) *The Art of Fiction: I, E. M. Forster*, An Interview by P.N. Furbank and F. Haskell. (Paris Review, 1953)

8) Forster' Introduction to *The Longest Journey* (World's Classics, 1960)

彼のかき立てられた想像に、五彩の谷が、炎の神々が、白雪の峯が浮び、音楽が充満し、生命の泉のほとりに、愛の神が立ち上る。

His wings were infinite, his youth eternal.

最後に次の一行が、この瞬間が紛れもなく、Miss Raby がアルプスの高原で経験したあの瞬間と同じものであることを示している。

They had got into heaven, and nothing could get them out.

二人の天国は short-lived で、Gerald died that afternoon. と彼は舞台から消えてゆく。Gerald は消えても、'eternal moment' は消えない。その五彩の炎に焼かれるように、Rickie は彼の目に愛の理想像と映じた Agnes を愛するようになり、

The devil must have planned it.

愛情の抜け殻と化した女と結婚するのである。一方その炎は、それが Miss Raby の心の中に20年間燃えつづけたように、Agnes の心の中に、最後の catastrophe での爆発を待つかのようになり、静かに燃えつづけるのである。

Agnes との結婚は Rickie の迷いの第一歩であった。やがて妻を愛さなくなった夫と、夫を尊敬しなくなった妻、

... those poor slaves

With one sad friend, perhaps a jealous foe,

The dreariest and longest journey go.

それこそ、表題の出典となった Shelley の Epipsychidion の句の通りの物憂い旅路が始まるのである。

Rickie の悲劇はいつも人生の大切なポイントを踏み外したところにある。Forster はそれを real と unreal という言葉で綴ってゆく。

“The cow is there.” という哲学問答で、この小説は symbolic に始まっているが、牛は見る人の虚構であるのか、見る人がいなくとも real に存在しているのであろうか。Agnes を立派な女性と見たのは Rickie の想像の産物で虚構に過ぎなかった。Sawston の Public School の教師となっては、少年の友に成ろうとする彼の初志は Agnes の兄に曲げられて、「教師の目」で少年達の行動を見るようになり、生徒の reality から遠ざかってゆく。

結婚、教師と一つ一つ躓いてゆく Rickie に最後の試練がやってくる。Rickie には、母と Robert との間に生れた Stephen という half-brother がいたのである。不義の子を Agnes は世間から隠そうとする。Rickie の良心は認めようと主張する。又もや彼は人生の Symbolic moment に立たされるのである。

Here and there in life we meet with a person or incident that is symbolical. It's nothing in itself, yet for the moment it stands for some eternal principle. We accept it, at whatever cost, and we have accepted life. But if we are frightened and reject it, the moment, so to speak, passes; the symbol is never offered again.

Agnes が勝って、たじろいだ Rickie はこの瞬間を失ってしまった。

漱石の「虞美人草」は明治40年（1907）の作であるから、*The Longest Journey* と同年の作であるが、甲野さんの口にする「人生の第一義」がまさしくこの symbolic moment に当る。Rickie は人生の第一義に生きる事に失敗したのである。宗近君は、甲野さんの言葉を借りて、小野さんを藤尾から引離しにかかる。

『此所だよ小野さん、真面目になるのは。世の中に真面目はどんなものか一生知らずに済んで仕舞う人間が幾何もある。』

小野さんはさしづめ Rickie や Philip や Cecil の系列の男である——三人とも小野さんのような軽薄才子ではないが。

第一義とはどんな活動かと問われて、

『第一義は血を見ないと出て来ない。』

と甲野さんは答えたが、宗近君の行動は藤尾を死に追いつめてしまった。

甲野さんは日本の哲学者らしく書斎の傍観者であるのに比べて、Rickie の友 Ansell は西洋の哲学者らしく思索と行動の人である。甲野さんと宗近君との二役を一人で引受けて、Rickie を unreality の迷路から救い出すべく Sawston にやって来る。Stephen も兄と知った Rickie に会うべく Sawston にやって来る。Agnes が金で追払おうとするのを Ansell が阻止する。彼は食堂に集った全生徒の前で、Rickie に弟のあること、わざわざ訪ねて来たその弟を追出そうとしていることを暴露する。虚偽の世界から友を救い出そうと機会を待っていた Ansell の、思い切った荒療治であった。Rickie も藤尾のように卒倒する。

Stephen が憎い父の子でなく、懐かしい母の子であると分って、Rickie の Stephen に対する気持が変る。母の写真を手にしながら提案する。

It is only her wish if we live together. She was planning it when she died.

Stephen は本能的に Rickie の心の底を見抜いてしまう。『僕は兄弟に会いたいから来たのだ。父の子であろうと、母の子であろうと問題ではない。それに君は父の子と考えて僕を軽蔑し、母の子と分って態度を変えた。』

“I see your game. You don't care about *me* drinking, or to shake *my* hand... You talk to me, but all the time you look at the photograph.”

そう言って彼は Rickie の手にしていた写真を破り棄てる。Stephen への愛情も実は母への愛情の投影に過ぎず、酒にくづれた彼の生活を改善しようと言う意気込みも unreal なものに過ぎなかった。

Once more he finds, as he found in the case of his marriage, that his attempted excursion into reality has been a failure.⁽⁹⁾

去って行く Stephen の顔を見て Agnes は、それが余りにも Gerald に似ているのでぎょ

9) Rex Warner : *E. M. Forster*, p. 17

とする。

and then (she) gasped 'Gerald,' and started crying.

物語の発端に出現して華かな光彩を投げ、忽ちにして消え去ったかに見えた 'eternal moment' は、Agnes の心の中に燃え続けていたのである。Gerald が彼女の嘗ての恋人であり、彼が死んで Rickie がその後釜になったことを知った Stephen は、Rickie がこの家で、もはや用のない wreck であると直感する。

"Come with me as a man ... They've no use for you here."

こうして Rickie は Stephen に引張られるように、妻のもとを去って行く。

或夜、居酒屋に入り浸る彼を探して、疲れ切った Rickie は踏切にさしかかる。近づいて来た貨車の明りが、酔いつぶれて線路の上に横たわっている Stephen を照し出す。

Wearily he did a man's duty. There was time to raise him up and push him into safety. It is also a man's duty to save his own life, and therefore he tried. The train went over his knees.

「第一義は血を見ないと出てこない」と言う甲野さんの予言が、ここでも的中するのである。他人の 'eternal moment' の幻影にかきたてられて、その光彩の中に自らを置いた Rickie は、結婚にも、職業にも、兄弟にも、real なものを掴み得ずに命を落してしまった。前作で 'eternal moment' を climax においた作者は、ここでは発端部において、しかも catastrophe で悲劇的な役割を果させているのである。

VI. A Room with a View

これは再び Italian Comedy である。

In fact *A Room with a View*, published in 1908, was planned as early as 1903, so it is not surprising that it is more like *Where Angels Fear to Tread* than *The Longest Journey*.⁽¹⁰⁾

A Room with a View のストーリーは Lucy と George の結婚である。plot はそこへ到達する紆余曲折であり、それを或いは romantic な、或いは symbolic な瞬間の積み重ねで進めてゆく。

第一は symbolic な瞬間である。Lucy がフロレンスの広場 Piazza Signoria を見物していた時、イタリア人が口論の末刺殺され、その血が、間近に居た彼女の絵を赤く染める。血を見て失神した彼女は、偶然居合わせて駆け寄った George の腕の中に倒れる。

and lo! one man was stabbed, and another held her in his arms.

死の象徴であるべき血が、生ける人間の中に起った変化の象徴となった。廻りを取囲んでいる respectability の世界から Lucy は一步抜け出した。人生に悩んでいた George は始めて生き

10) *Ibid.*, p. 18

ようと決心した。それは二人の青春への分岐点となったのである。

第二の瞬間はフロレンスの近郊の山の上で起る。遙かに Arno 河を見下した、一面葎に色どられた美しい山角に George が立っている。そこへ Lucy が上手の茂みから、落ちるように現われる。物音に驚いた George は振り返って、天から降ってきたような Lucy を眺める。

He saw radiant joy in her face, he saw flowers beat against her dress in blue waves.

The bushes above them closed. He stepped quickly forward and kissed her.

Lucy はこの一種の eternal moment を従姉 Bartlett に告白する。

"I am a little to blame. I had silly thoughts. The sky, you know, was gold, and the ground all blue, and for a moment he looked like some one in a book."

"In a book?"

"Heroes—gods—the nonsense of schoolgirls."

噂を恐れて Bartlett は Lucy をローマに連れ去り、そこで登場した Cecil が彼女の求婚者となり、舞台はイギリスに移って、Cecil と Lucy の婚約の発表となる。Lucy は自分の心を知る為に、もう一人の男性を経由しなくてはならないのである。

第三の瞬間は牧歌的である。Sulley Hills の Lucy の邸の近くに、流れが林間におのづと作った美しい池がある。Lucy の弟が初対面の George を誘って水浴をやる。牧師の Beebe まで一緒になって、水草にからまり、泥に足を取られながら、少年に返った彼等は水をかけ合い、池を巡ってレースをやり、お互の服を蹴散らしてふざける。そこへ Lucy が母と Cecil を連れて現われる。半裸体の George の爽やかな挨拶。Lucy はその後何回このシーンを心の中で繰り返したか分らない。照れるか、無関心を装うか、

But she never imagined one who would be happy and greet her with shout of the morning star.

第一の瞬間の血の色が、"Under a Loggia" という小説の表紙の色となって再現する。あの山上のエピソードが Miss Lavish の筆によってこの書物の中に生き生きと描写されて、何も知らない Cecil がそれを Lucy と George に読み聞かすことになる。思出にかき立てられた George の言葉が、Lucy の心にひそんでいた危惧を引出し、彼女の開眼のきっかけとなる。

You cannot live with Cecil. He's only for society and cultivated talk. He should know no one intimately, least of all a woman.

やがてテニスに誘われ、それを断る Cecil の言葉に、

I am no athlete. There are some chaps who are no good for anything but books. Lucy は眼から鱗が落ちるように、彼とは一生を共にし得ないことを悟り、婚約を解消する。

Forster は *The Longest Journey* において青年達の父を描いた。Rickie の、Stephen の、弱さ強さの源泉を、それぞれの父の性格においた。Ansell の父も一廉の人物であった。併しいずれも影の人に過ぎなかったが、この作の George の父 Mr. Emerson は、がっちりした体に子供っぽい目をして、思った事は周囲を顧慮することなく直言しながら、舞台狭しと活躍

する。

冒頭で、Arno 河を見晴らす自分達の室を Lucy 達に譲って、この老人は二人を結びつける。

I don't require you to fall in love with my boy, but... By understanding George you may learn to understand yourself.

曲折の後、Cecil との婚約を解消し、George をも避けてギリシャへ旅立とうとする Lucy を引留め得たのも彼である。

"You love George!" ... the three words burst against Lucy like waves from the open sea.

老人の言葉に Lucy は始めて自分の心を知る。

It was the face of a saint who understood.

その顔に見つめられながら、Lucy はすなおに George を選んだのである。

A Room with a View はこのように、Forster の作品中珍しく Happy Ending に終わっている。発行順では小説の第3作となるが、早く1902年頃にその構想が浮び、1903年に前半が書かれているとすれば、第1作より先行しているのである。特にその前半が、全作品中最も軽快な喜劇風のタッチになっているのはそのためであろう。

'eternal moment' も *The Eternal Moment* (1905) で悲劇性をはっきり備える前の軽快な形をとっている。一瞬の中に永遠を宿すには、その一瞬が一生に一度しかない、失えば再び手に入らないものでなければならない。この作も悲劇で終れば、各の瞬間は eternal moment に結晶したに違いない。

VII. Howards End

Samuel Butler の *The Way of All Flesh* は1903年、Forster が Cambridge を出て *Independent Review* に短篇を書き始めた頃に死後出版されたもので、Butler を尊敬していた彼に感銘を与えたと思われる。

If Forster knew any particular renaissance in 1903, it doubtless owed more to Samuel Butler's *The Way of All Flesh*, ... than to the standard Bloomsbury gospels.⁽¹¹⁾

The Way of All Flesh で、結婚式の直後の男のよるべなき不安のドライな描写が印象的であるが、

... he is alone with a woman whom he has married but never genuinely loved...

It is at this point that even the stoutest heart must fail.⁽¹²⁾

11) Wilfred Stone: *The Cave and the Mountain*, p. 41

12) Samuel Butler: *The Way of All Flesh*, (Modern Library) p. 76

Howards End も同じようなシーンに満ちている。教養と向上を目指して机から離れない Leonard に向ってベッドから

You do love me?... But you do love me, don't you?

と繰返えす Jacky. Henry の Margaret に対するぎこちない求婚ぶり, passion のない最初のキス。

On looking back she was displeased.

「人間の関係」‘human relationship’は Forster の絶えざるテーマであるが、この作品では特に、幾組かの男女の関係

劈頭での Helen (Schlegel 家の妹) と Paul (Wilcox 家の次男) との恋愛事件
本筋の Margaret (Schlegel 家の姉) と Henry (Wilcox 家の主人) との結婚問題
傍筋で pathetic で droll に描き出される Leonard と Jacky の結婚生活
意外な過去のスキャンダルとして露見する Henry と Jacky との関係
そして Helen と Leonard との悲劇的な恋愛事件

それらが人生の種々相を描き出して、この小説をさながら Forster の “The Way of All Flesh” にしているのである。

第1章で *Howards End* が Utilitarianism と Romanticism との勝負であると述べたが、それは言い換えれば、*Howards End* と言う邸宅（英国の象徴）をめぐっての Wilcox 家（英国を発展させてきた活動的な支配階級）と Schlegel 姉妹（哲学と芸術と人間性）との対決である。

Howards End is a novel about England's fate. It is a story of the class war... It asks the question, “Who shall inherit England?”⁽¹³⁾

勝負の結末は、Mr. Wilcox と Margaret が結びつき、Helen と Leonard との illegitimate child が *Howards End* の後継者となる。妥協し得ない二つの対立者が手を結んで、その後継者として Romanticism の結晶のような赤ん坊が設定されるのである。

第1作から第3作へと現われ続けてきた ‘eternal moment’ が、この作でも上の第1の Helen と Paul との関係に顔を出す。併しもはや plot 展開の重要な契機としてではない。好んで使った小道具を作者はこの作を最後に使はなくなるのである。

Howards End は Helen が姉 Margaret に送る手紙で始まるが、その Postscript に現われる爆弾的な告白は、

“Paul and I are in love.”

The Eternal Moment の Opening Scene の

“A young man fell in love with me.”

と言う Raby の叫び声と軌を一にしている。回想して Helen 自身認めているように、彼女は

13) Lionel Trilling: *E. M. Forster*, p. 102

Paul に恋をしたと言うより Wilcox 家の男性的雰囲気恋をしたのであって、Henry と Charles 父子の行動の美に陶醉しかけている所へ、次男の Paul がナイジェリアから、試験にパスして前途洋々と帰って来たのである。

... ready to flirt with any pretty girl.

20年間幻影を暖めつづけた Raby と違って、Helen は1日で自らの誤りに気づき姉に電報を打つ。

All over. Wish I had never written.

併しこのかりそめの恋は彼女の心に傷あとを残した。

A man in the darkness, he had whispered "I love you" when she was desiring love. In time his slender personality faded, the scene that he had evoked endured. In all the variable years that followed she never saw the like of it again.

これを Helen の 'eternal moment' と看做してよいと思う。作者もそれを肯定している。

by collisions of this trivial sort the doors of heaven may be shaken open.

かりそめの出逢いが開いて見せた天国は、Helen には二度と訪れない。'eternal moment' はこの発端部にのみ「残響」をとどめて、plot から消え去るのである。

VIII. A Passage to India と結び

前作から14年のブランクがあるが、そこには第1次大戦が介在しているのである。1912年の秋から翌年春にかけて Forster は第1回目のインド旅行をする。1914年7月、世界大戦の勃発は書き始めていた *A Passage to India* を中止させる。大戦終了後、1921年再びインドへ渡り、小説の第3部の舞台となる Dewas の藩王の秘書代理となって8ヶ月程インドで暮す。こうして1924年、筆を執り始めてから10年を経過して、*A Passage to India* を書き上げたのである。

これが Forster の最後の小説であるが故に、我々はそこに作者のテーマの総決算を読もうとする。大英帝国支配下のインドと言う政治問題でなく、人生の問題がこの書の真のテーマだとすれば、人生は究極において何だと Forster は結論しているのであろうか。

Great as the problem of India is, Forster's book is not about India alone: it is about
(14)
all of human life.

英国人は憧れを抱いてインドへ渡って行く。そして彼等が見出したものは何か。

They had made such a romantic voyage across the Mediterranean and through the sands of Egypt to the harbour of Bombay, to find only a gridiron of bungalows at the end of it.

14) *Ibid.*, p. 138

老婦人 Mrs. Moore がインドへやってくる。彼女は回教徒の Mosque でインド人 Aziz に会い、彼を通して印度が始めて理解出来ると感じ、Aziz はこの英婦人の中にインドの真の同情者を発見して喜ぶ。

The flame that not even beauty can nourish was spring up, and though his words were querulous his heart began to glow secretly.

Mrs. Moore は、Chandrapore 市の治安判事を勤めている息子 Heaslop の結婚相手として Adela を連れて来たのである。

Adela と言う美しくない女性、結婚の決定が最大の問題であるこの女性をめぐっては恋愛事件は起り得ない。14年前の *Howards End* を最後に、Forster は 'eternal moment' のトリックから outgrow したと前章で述べたが、恋愛事件がなく、Aziz と Fielding の男性の友情がテーマであるこの作では、もはや plot の中に 'eternal moment' の入り込む余地もないのである。

この問題にならない Adela がとんでもない事件を引き起して、物語を一挙に climax に持って行く。Mrs. Moore と Adela は Aziz に招待されて Marabar Caves を見物に出かけたが、洞窟の中で Aziz に襲われたと幻覚した Adela は、彼を告訴して、印度人と英人との対立が激化し、洞窟と裁判所がストーリーの頂点となる。

Forster の作品には、自らは大した行動はしないが、一種の影響力となって、神のように全篇を支配している人物が出てくる。*Howards End* の主 Mrs. Wilcox がそうであり、この作の Mrs. Moore がそうである。裁判所のシーンで Mrs. Moore は神格化する。インド人達は彼女だけが Aziz の無実を証明し得ると信じている。

"Give us back Mrs. Moore for five minutes only, and she will save my friend."

そう叫ぶ辯護人に合わせて、群衆は彼女の名を合唱し出し、やがてインド流に発音された

"Esmiss Esmoor, Esmiss Esmoor..."

の唱和が、神の名の唱和のように、法廷の内外にひろがってゆく。

この symbolic な Mrs. Moore がインドで得たものは何か。彼女の「印度への途」の結論は何か。彼女は、インド人側の証人に引き出される事を恐れた Heaslop によって英国に送り返され、その航海途上で亡くなってしまうが、インドを離れる時、彼女の疲れ切った頭に残ったものは、Marabar Cave のブーンと言う無気味なエコーのみであった。

インドには幾つかの有名なエコーがある。Bijapur のドームにまつわる囁きのエコー。長い文句がそのまま返ってくる Mandu のエコー。併し Marabar Cave のエコーは、側壁に向かって何を叫ぼうと、頭上の岩からはブーンとしか返って来ない。

"Boum" is the sound as far as the human alphabet can express it, or "bou-oum," or "ou-boum," — utterly dull.

岸の椰子の木は彼女に別れを告げるかのように問いかける。

"So you thought an echo was India; you took the Marabar Caves as final?"

その通りで洞窟以後の彼女はすべてに、友にも、子供にも、神にさえも興味を失ってしまった。

the universe offered no repose to her soul, ... she didn't want to write to her children, didn't want to communicate with anyone, not even with God.

男と女の問題に対する彼女の last word は何か。

Why all this marriage, marriage?... The human race would have become a single person centuries ago if marriage was any use.

男と女が駄目なら、男と男の友情はどうであろうか。

Forster は本来 homosexual である。*The Longest Journey* の Rickie は恋の幻影の虜となって Agnes と結婚するが、彼が真に求めたものは男と男との交友であった。

He wished there was a society, a kind of friendship office, where the marriage of true minds could be registered.

A Passage to India の主テーマも、英人教師 Fielding と印度人医師 Aziz との国籍を越えた友情であった。それは男性と男性との友情であるが故に恒久化されねばならないものである。しかも統治者と被統治者との友情であるが故に挫折しなくてはならない。

東は東、西は西、それをつなぐ橋はないと言う事実を語る為に、⁽¹⁵⁾ 'round character' として生き生きと動いていた Fielding も Aziz も、結末で急に精彩を失なって 'flat' になってしまう。

Nearly all novels are feeble at the end. This is because the plot requires to be wound up.⁽¹⁶⁾

これは Forster の言葉であるが、自らの作品もその例外ではあり得なかった。

この友情の挫折と洞窟のエコーとを結んで、Forster の最後の message を次のように取ろうとするのも確かに一つの見方であろう。

If friendship, the highest form of love, the best of personal relationship, cannot endure, the message of *A Passage to India* may seem to be the echo Mrs. Moore hears in the Marabar Caves, the echo intimating that everything —from love to filth— is the same, and that nothing has reality.⁽¹⁷⁾

Forster はこの作を最後に（1924年、45才）再び小説の筆を執らない。Kirkpatrick の “A Bibliography of E. M. Forster”（1968）を見ると、1924年以後も、伝記に評論に随筆に、或いは講演、新聞・雑誌への寄稿と、1964年まで、*Passage* 以後実に40年間も、多彩な創作活動をつづけていることが分る。

15) Forster: *Aspects of the Novel*, p. 74

16) *Ibid.*, p. 91

17) Norman Kelvin: *E. M. Forster*, p. 131

しかも *Passage* を最後に小説創作の泉が何故か枯渇したのである。1959年のテレビのインタビューで Forster は述べている。

“I somehow dried up after the *Passage*. I wanted to write but did not want to write
novels.”⁽¹⁸⁾

短篇と言わず小説と言わず、それこそ全作品で追求してきた Human Relationship に対して pessimistic になった時、Poetry と Passion, そのシンボルの ‘eternal moment’ が作品から消えた時、Forster は小説を書くことを断念しているかのようである。

(1969年9月4日受理)

18) *E.M. Forster on His Life and His Books: An Interview Recorded for Television*, by David Jones. *Listener*, 1 January, 1959